



なかなか夏の終わりが見えない日中、熱中症がとても心配です。

思った通りにいなくてもたいしたことはない？

2学期が始まり、各学級で当番活動や係活動が話し合われている場面をたくさん見せていただきました。中には「〇〇会社」みたいに、自分たちが学級を豊かにする創造的な活動を計画されているところもあり、大変興味深い。子どもたちの豊かな個性が花開き、楽しく趣のある文化が発明されていくのだろうと、期待が膨らみます。

発明といえば、白熱電球などを発明したアメリカの発明家、トーマス・エジソンを思い浮かべられる方が多いのではないのでしょうか。蓄音機は、そのエジソンの発明品の中でも、代表作と言ってもいいのではないのでしょうか。



ただ、その蓄音機、もともとは「メッセージなどの録音」のために作られたということ、私は最近知りました。当時、エジソンは電話機の発明に全力を注いでいたそうです。そして、エジソンにはグラハム・ベルという好敵手がいました。非常に激しい競争の中、現実はなかなか厳しく、ベルの発明する電話機が一步早かった。電話機の発明者はベルということになってしまいました。ただ、エジソンには、発明王としての意地があったのでしょう。まだまだ高価な電話機は庶民には行き届かず、一部の富裕層で使われるのみ。そこで、エジソンが考えたのが、小さな携帯蓄音機を使って、好きな場所で声のメッセージを送ることはできないだろうか、ということでした。

試行錯誤を重ね、出来上がった第一号の「フォノグラフ」(当時の蓄音機の名前;「フォノ」はギリシア語で「サウンド」という意味)の用途は、「速記者を使わないで手紙を書いたり、各種の口述に使える」というもの。

ただ、音が録音できるということで、音楽関係の方々がこの発明をほっておくはずがありません。この発明がきっかけとなり、これまで演奏を聴きにいかなければならなかった音楽は、家庭で何度も楽しむことができるものに劇的に変わっていくことになります。

しかし、当時のエジソンは、この使い方に難癖をつけたといい残されています。そんな目的のために作ったものではない、と。ただ、結果的にエジソンが計画した通りの使い方は広がらず、家庭で音楽を聴くという素晴らしい体験を提供する蓄音機は、その使い方が最大の売りになり、一般庶民にまで広く使われる素晴らしい機械となりました。そして後日、エジソン自身もその使用方法を認めたといわれています。(諸説あり)

エジソンですら、思ったようにはならない。その上、後付けでの理由づけ。

あっぱれ、エジソン。

計画はとても大切です。ただ、その計画がうまくいかないからといってあきらめるのは、もったいないですねえ。発想をグンと広げ、目的以外でも使える方法はないものかと、試行錯誤することも大切なのかもしれません。